

もう一つのカナダ

—いま、極北の 子どもたちの周辺で—

鍋谷 智恵子



エスキモーという名前は、南方のアルゴンキン・インディアンが「生肉をたべる輩やから」という意味で、ベーリング海峡からグリーンランドに至る極北地方に住む人々につけた名前だ。そのエスキモー自身は、この言葉を蔑称だとし、本来の呼び方『イヌイット』という名称を用いている。『イヌイット』というのは、彼らの言葉で『人間』という意味。生き物としては、彼らと他の動物しかない北の極地において、彼らだけが『人間』だったのである。今日、『イヌイット』という呼び名は、カナダにおける公称にもなっている。

二年間の予定のカナダ留学も、そろそろ終わりに近づいた頃のこと。その『人間』に、よく似た『日本人』の私は、イヌイットをたずね、バフィンランドの3つの村を訪問する機会を得た。極北という、もう一つのカナダでの、ほんのわずかの生活体験で私が垣間みて感じた、子どもたちを取り囲む様子をレポートしてみたい。

◎子守り歌

「私たちイヌイットにはね、昔から、一人一人の子どものために歌を作る習慣があつたのよ。」

「ぜひ、お願ひします！」

人口二千人のイクアルイット（かつては、フロバシア・ベイと呼ばれた）で小学校の教師をする、イヌイット

うれしいときは、おもいつきり
飛び跳ねてごらんよ

女性、メアリー・カズンさんは話してくれた。子育てに

おまえは ちつとも きれいじやないけど
私にとつて 一番すてきな子

携わつた者が、その赤ちゃんだけのために作り、家族の

たとえ雪が降つても
元気に外で遊んでおいで

間で、その赤ちゃんのためだけに歌われるこの歌をアカ

ウス（a q a u s i q）という。

「メアリーさんのアカウスは？」との私の勝手な質問に
彼女は困った顔をした。子育てに関係がない者の前で歌

つて披露などするものではないらしい。

無理なことをせがんだと、後悔しながらも、なんとか、そのアカウスを聞いてみたいといふ気持ちでいた私に、メアリーさんはこう続けた。

「でもね、アカウスの中には、その赤ちゃんが、大きくなり、年老いて亡くなつた後、家の者に歌い継がれ、村に広まり、今ではわらべ歌のようになつたものもあるのよ。一つ歌つてみましょうか。」

『語り』とも言えるこの歌、とてもやさしく耳に響いた。撥音の多いイヌイット語の独特的の音節が、単調ともいえる音の流れにリズム感を出している。メアリーさんに英訳してもらったものを邦訳してみると、前記のようになつた。子守り歌——ちょうど、そんな感じだ。イヌイットの母が子をおぶり、口づさむ——そんな様子が目に浮んだ。

「今じゃあアカウスをもつ子どもも少なくなつてきてね

つての犬ぞりに代って、スノーモビルが普及した。

定住生活をしているから、行く先々でイグルー（氷の家）を作っては夜を過す、という昔ながらの狩猟生活は、ほとんどみられない。狩りに泊りがけで行く際には、テントを携帯する。イグルーの作り方を知らない若者が増えたと、年輩のイヌイットは嘆いていた。

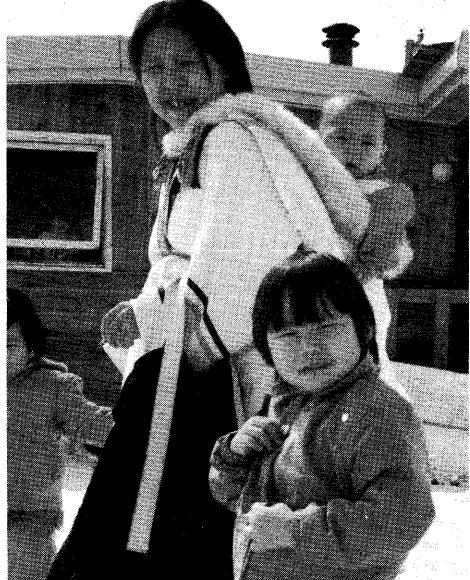
今では、大部分のイヌイットは、暖房のきいた建物に住み、通信衛星が中継してくる英語のテレビ番組を楽しむ。電話も普及している。

急速化したイヌイット社会の西洋化は、白人カナダ社会による、極北地域の植民地化でもある。ひとつの民族が、彼らの力ではどうしようもない力で支配される。それが、伝統文化の崩壊ということでもある。

◎近代化の波

狩りだけで暮らしているイヌイットも、めっきり減つ

てきてる。村に住むようになった、多くのイヌイットは、学校や公共機関、発電所、飛行場などで働くようになり、狩りをするのは、週末ぐらいのもの。しかも、か



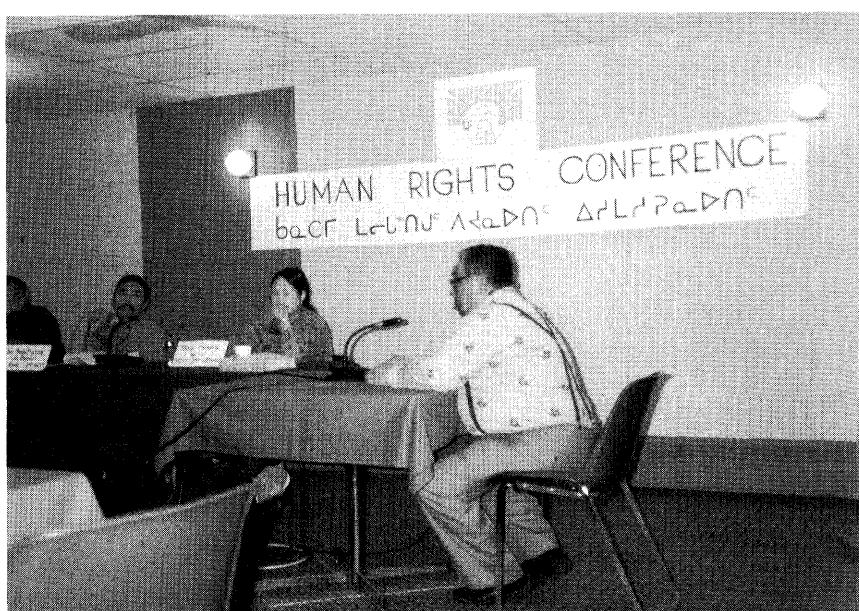
◎母語としてのイヌイット語と学校教育

現代の子どもたちとの心の隔りを感じてやまない、民間のイヌイットの間では、伝統を守ろうとする意識が、次第に高まってきてる。

滞在中、イクアリイットで、カナダ連邦政府の主催により、人権会議が開かれた。会議は、オタワからやつてきた四人の政府関係者と、バフィンランドの主たる十二のコミュニティーからの代表者が参加し、一般公開で、行われた。

子どもの教育、福祉問題、青少年の非行問題、そして労働問題と、今日イヌイットにとつて深刻な社会問題を、人権の側面から、四日間にわたつて討議した。これらの諸問題に共通するのは、急激なイヌイットの伝統文化の崩壊によつて、イヌイットの人権が侵害されつづること。教育の面からの立て直しを図ろうといふ訳か、教育問題が問われた日は、最も活発に民間の参加があつた。

「このように『人権』について話す機会を私たちの土地で行うことができるようになつたことを、本当にうれしく思います。……私が子どもの頃、そして、ついこのあいだまで、私たちイヌイットは、白人のカナダ人が支配する政府に対し、自分たちの権利を主張することが、



それも、自分たちの言葉、イヌイット語を使って主張することが可能だとは、全く考えてもみなかつたからです。」

年配のイヌイット女性、ポウリエ・パトンさんのこんな言葉が、印象的だつた。

ついこの前まで、イヌイット語を母語とする子どもたちにも、南部から来た教師による英語での学校教育が強いられていた。その結果、イヌイット語を話さない若者が増えるという危機に直面した。

二、三年単位で北の奥地へやってくる南部カナダの教師に、イヌイット語への『思いやり』を望むことは、難しかつた。しかし、言葉が、その文化の中核であることを思うと、イヌイット語の崩れは、その文化の崩れであり、それに拍車をかけたのが、英語による学校教育の普及であろう。イヌイット語での教育には、イヌイット社会で育つた教育者が必要である。二年前に、モントリオールのマックギル大学の指導のもと、イヌイットの教員養成専門学校がイクアルイットにできた。現在、生徒数

は、一年生八人、二年生六人。もちろん、メアリーさんを含め、これまでにも、南部の大学で教育を受けた、イヌイットの教育者が数名いた。しかし、今後は、バフィンランドにいながらにして、教師の道を進むことができるようにになつたのである。

イヌイットの文化を、内側から把握する者が、イヌイットの教育にどんどん、携わる日が近いのは、喜ばしい。

◎伝統が息づく食生活

日本で生れ育つてしまつたよそ者の私にとって、とても新鮮で心踊る体験も、そこにはたくさんあつた。

例えれば『食事』これが、イヌイットの生活に導入されたのも、ごく最近の話。近代化の側面にすぎない。食事とはいつたい何か。人口四百人足らずの村、ブライトン・アイランドのアウドランキアック家を尋ねたとき、そう問わずにはいられなかつた。

朝食、夕食といった一定の食事時間や食卓を囲む情

景、家族、友人。そして栄養のバランスや調理の方法——食事にまつわる、ありとあらゆる連想。しかし、こういった意味の食事は、イヌイットには存在しない。いや、かつて存在しなかった。

ルボライターの本多勝一氏によると、本来、イヌイットにとって食事とは、腹が減ったとき食べ物を胃袋につめこむことである。お腹がすく。だから食べる。アウドラキアック家の台所の調理台には、カリブー（トナカイの一種）の生肉のあらゆる部分が、凍ったまま置かれている。台所の隣りの部屋で、夕方、家の皆といっしょにテレビを見ていたら、子どもも、おとなも、てんてんばらばらに台所のすみへ行っては、ナイフで生肉を切り食べている。三、四才児のナイフさばきは、大したものである。

おもしろいのは、よその子どもも、ふらりと家へやってきたかと思うと、勝手に台所の調理台の方へ行き、生肉をしゃぶっていること。私自身、この勝手な生肉しゃぶりを、いっしょ楽しだおかげで、『夕食』抜きにはならずに済んだ。

今では、私たちが連想するような『食事』もするが、生肉しゃぶりも、不可欠な日常生活なのである。

もう一つ、食べ物の話をしよう。

イヌイットが、アザランを食べることは、広く知られている。アウドラキアック家に滞在中のある週末、主人がアザランを捕えて狩りから帰ってきた。イヌイットの男たちにとって、獲物を捕った後の解体はどうれしいところはない。

主人は、まるまるとしたアザランの中央をまっすぐに切り開き、あとはちょいちょい生肉をつまんでは、口に入れながら各部を処理している。無駄にする部分など全くない。

獲物を祝い、ナイフを片手に、近所の人が、子どもとおとなあわせて六人やつてきた。切り開かれたアザランは、ぶ厚い脂肪のために円形を描いている。それを皆で囲むように座り込んで、いろいろな部分を、切っては食べ切っては食べ。楽しそうだ。うれしくてたまらない。

（アーヴィング）　（アーヴィング）　（アーヴィング）
（アーヴィング）　（アーヴィング）　（アーヴィング）



獲物を祝う。獲物を捕らえた男を祝う。——その活気は、生肉を食べることに対する私の心理的な抵抗を、どこかへ吹き飛ばしてしまった。

◎折り紙に挑む

こんなこともあった。

三年生の教室へ折り鶴を教えに行ったときの事だ。二十人程いる児童の教室の前で模範をみせる私に、きわめて静かについてくる子どもたちに、私は驚かされた。たまに声が上がったかと思うと、「次はどうでしょ?」と、先を考えながら、自分で進もうとする。

これまで、カナダの南部の小学校でも、同じようなことをしたが、その際、子どもたちはきまつて、わいわい



い、がやがや、「これでいいの?」と、何度も私の方へ確認のために声をかけてきた。また、一つ出来上がるごとに、その完成したものを大切にし、また新たに他のものを作りたがるが、もう一つ同じものを使うことには、あまり関心を示さなかつた。

イヌイットの子どもたちに折り紙を教えてうれしかつたのは、家に帰つてからも、何度も自分で作つてみていれる子どもが多いことだ。買い物に雑貨屋へ行つたときに、以前、折り紙教室で会つた子どもに再会した。子どもはその場で手近な紙切れを持ってきて、正方形を作り、店の隅へ私を呼び、私の前で自分が一人で折り鶴が折れるようになった事を得意そうに見せてくれた。『自分で出来る』ことの喜びを伝えてくれたのだ。これは、多くの南部の子どもたちが、折り鶴を『持つていることに喜びを感じている』のとは、随分違うようだつた。

◎おわりに

メアリーさんに、アカウスの話を聞いた日の翌日、私

はカセットテープを持つて再び、彼女に会いに行つた。

「ぜひ、メアリーが歌う、イヌイットのわらべ歌を録音させてほしい。」と、お願ひすると、うれしそうに、四つの歌を続けて歌つてくれた。

●カヤックをいっしょうけんめいこごうよ

●お母さん、昼間、星はどこへ行くの

●パンツの中のしらみタイジ

●小鳥がやつてきた

こんな題名のそれぞれの歌は、わらべ歌独特の音のおもしろ味、自ら口遊む楽しさがある。そして、メアリーサンの歌には、これらの歌を歌い伝えたいというイヌイット女性の願いが込められ、どこか哀愁が漂う。母語、文化、歴史、そういった民族全体の危機を感じて、なんとかしなければ——という切なる思いである。

年長者の子どもの頃の文化に対するどこか感傷的な思いは、伝統文化を守る動きにつながる。国家の統一性と民族の独自性をいかに調和させていくかという現実問題を問うためには、そのような感傷的なエネルギーは、今

日大切なのである。

モザイク文化が文化の特徴とされるカナダでの話である。同質性が強いとされる日本の中では、少数民族に対する問題、強いては、社会的弱者とされる障害者の問題が、より深刻であることを忘れてはいけない。

移民の国、カナダで、移住者たちより、はるか以前に大陸へやつてきたイヌイット。様々な文化と自らの伝統。多様化していく価値観の中でも、伝統文化の心は忘れないでいてほしい。

(ウインザーユニバーシティ修了)

〈参考文献〉

- 「子どもの文化人類学」原ひろ子 一九七九年 晶文社
- 「カナダII エスキモー」本多勝一 一九八一年 朝日文庫
- 「エスキモー・極北の文化誌」宮岡伯人

一九八七年 岩波新書

○「北極探險十二回」C・W・ニコル(竹内和世・訳)

一九八七年 新潮文庫